

掃除の仕方を教えること／学ぶこと

——就労支援の相互行為分析 (3)——

立教大学 須永将史

1 目的

本報告の目的は、「ひきこもり」就労支援における、職業体験の実践の解明を目的とする。就労支援をおこなう NPO の取り組みの一環である集合住宅の「掃除」をすることで、職業実践の方法を学んでいくプロセスを解明する。とりわけ、新しくこの支援に参加する利用者に対し、スタッフが掃除の「仕方」を教え、利用者が学んでいくそのプロセスがどのように相互行為的に達成されるかを明らかにする。

2 方法

東北地方における NPO でのフィールドワークによって収集したデータを会話分析の手法によって分析する。本報告で扱うデータは、集合住宅で通路や階段を掃除するというワークを撮影した映像データである。とくに、新規参加者がスタッフや先輩利用者から掃除の仕方を教えられ、やり方を学んでいく場面に焦点を絞って分析する。それぞれの場面において、「発話」や「身体的ふるまい」、そして周囲の状況や道具を含む「環境」がどのように参加者によって利用されるのか、その利用によってどのように教示と学習を達成していくかを明らかにする。発表では、会話断片に加え、映像データの静止画をトレースした線画を使用する。

3 結果

集合住宅の掃除は、通路の掃き掃除、扉や階段の手すりの拭き掃除、蜘蛛の巣取りといったワークの分業によって構成されていた。新規利用者は、一日に数件ある集合住宅ごとに、それぞれのワークのやり方を教えられた。い最初になされるインストラクションに続いて作業が開始され、いったん開始した作業中に、その都度「正しい」やり方に訂正されていた。これにより、(1) それぞれのワーク遂行のための道具の使い方を学んでいった。同時に、(2) その道具を使って掃除するために、汚れやほこりをその都度見出していきやり方が教えられ／学ばれた。(1) や (2) を通じて、道具を使用するだけでなく、どうすれば効果的に道具を使用することができるのかが、教える側と教えられる側の身体的相互行為のなかで実演 demonstrate された。

4 結論

就労支援において、職業実践の方法を学んでいくプロセスは、きわめて相互行為的なものであった。とくに、正しい掃除の仕方を教える／学ぶことは、ことばやふるまいを通じたやりとりによって支えられる達成のひとつだった。発表ではこの点を、データを示しつつ述べる。

文献

西阪仰, 2008, 『分散する身体—エスノメソドロジ的相互行為分析の展開』勁草書房。